

KITA ニュース

KITA
Kitakyushu
International
Techno-cooperative
Association

NO.40号
January 2014

目次

- 2頁 理事長年頭あいさつ
- 3頁 H25年度上半期研修コース実績
- 4頁 国際研修
- 8頁 海外での活動状況
 - ロシア、ベトナム、タイ
- 10頁 NEWS&TOPICS
 - KME(北九州メンテナンス技術研究会)の近況
 - 海外展開への協力会社紹介(アタカ株)
 - 国際親善報告
 - 帰国研修員との交流
 - 助成金御礼



帰国研修員の北九州JICA研修風景

～帰国研修員との交流～

コースリーダーは、研修コースが終了した後も研修員の方々と様々な面で交流を深めております。「帰国研修員のフォローアップ」は、彼らが帰国した後の自国での技術支援に大いに役立つ手段となっております。

<平成26年> 理事長年頭あいさつ



北九州国際技術協力協会
理事長 古野 英樹

新年あけましておめでとうございます。

昨年後半からアベノミクスによる日本経済の上昇機運が感じられるようになってきました。好調を維持している米国に加えて中国が底を打ったとの報道が流れ、欧州でも薄日の気配が見え始めたとのニュースも伝わってきました。日本の周囲には明るい材料が少しずつ増え始めた昨年の後半でした。

このような中で、KITAも中長期的な視点のもとで体質改革の本格的な1歩を踏み出した1年でありました。

昨年、私が就任したH23年1月の就任当初から言い続けてまいりました下記の2点をKITA中長期指針として改めて設定しました。

KITA中長期指針

1. KITA財産づくり
2. 「KITAらしさ」と「北九州立地の強み」追求

この指針に基づいて昨年の5つの事業方針を掲げた訳ですが、昨年はこの5つの事業方針の1年目としてのステップを確実に踏むことができたと思っています。

北九州市が世界の環境都市としてアジア都市のグリーン成長をリードするその役割の一端をKITAは期待され、また北九州市のイノベーションを市民力(民間パワー)で動かすに際しての役割の一端もKITAは期待されている訳です。JICAとの連携を取りながらこの役割を担うべく、海外ニーズ調査発掘及び海外ネットワーク構築を推進しました。この構築を確実なものとするために海外研修員ネットワーク構築の核として海外人材データベースの開発を完了させました。

事業力強化・充実に関しては、その基本となる人材の強化・充実を実現しました。新しい戦力を確保し、人材の多様化も進みました。また海外ニーズ調査発掘と海外ネットワークの構築の整備結果を事業力に転嫁させるための業務ルーティン確立が始まっています。

KITA経常収支の黒字体質確立については、計画精度の向上が着実に進み、その結果の収支向上対策の具体化が明確になりつつあります。

システムインフラの目玉である研修事業業務支

援システムはコースリーダーへの導入教育が順調に進んでおり、H26年からの本格活用開始の目途が立ちました。

公益財団法人運営の定着化は着実に進展し、日常マナーもほぼ確立されつつあります。

このようにH25年の5つの事業方針は確実に進展しており、新年ではこの5つの事業方針の最終年に相応しい成果を残すべく下記事業方針に努力を傾注して参ります。

1. 海外ニーズ調査発掘と海外ネットワーク構築の一層の推進

KITA財産づくりの最重要課題として下記3点を推進する。

- (1) JICA・北九州市関係部局との連携によるニーズ発掘と共有化
- (2) 海外ニーズ発掘活動とその集約および計画策定の定例化
- (3) 海外研修員ネットワーク(海外人材育成データベース活用)の積極的な運用と拡充

2. 研修事業・技術協力事業の事業力強化・充実

事業力の強化・充実には関係先との連携確立と計画性の確保が必須となる。

- (1) KITA内部部門間連携のさらなる強化
- (2) JICA・北九州市関係部局との連携体制確立
- (3) 年次事業計画の策定・実行

3. KITA経常収支の黒字体質確立

KITA発展の前提となる財務体質向上のために下記を推進する。

- (1) KITA収支計画精度向上と中長期見通しの策定
- (2) KITA内事業部門別採算の確保

4. システムインフラ整備3年計画の推進

H24年度～H26年度の3カ年でKITAシステムインフラを整備する。

- (1) 計画最終年として3年計画の完成
- (2) システムインフラの活用と拡充計画の具体化

5. 公益財団法人運営の定着化・透明性確保と諸情報の公開

公益財団法人の認定を受けて2年、新制度の安定運用を実現する。

以上、KITAのさらなる体質強化と活性化を推し進め、ひいては北九州、日本のステイタス向上にも貢献したいと思っています。

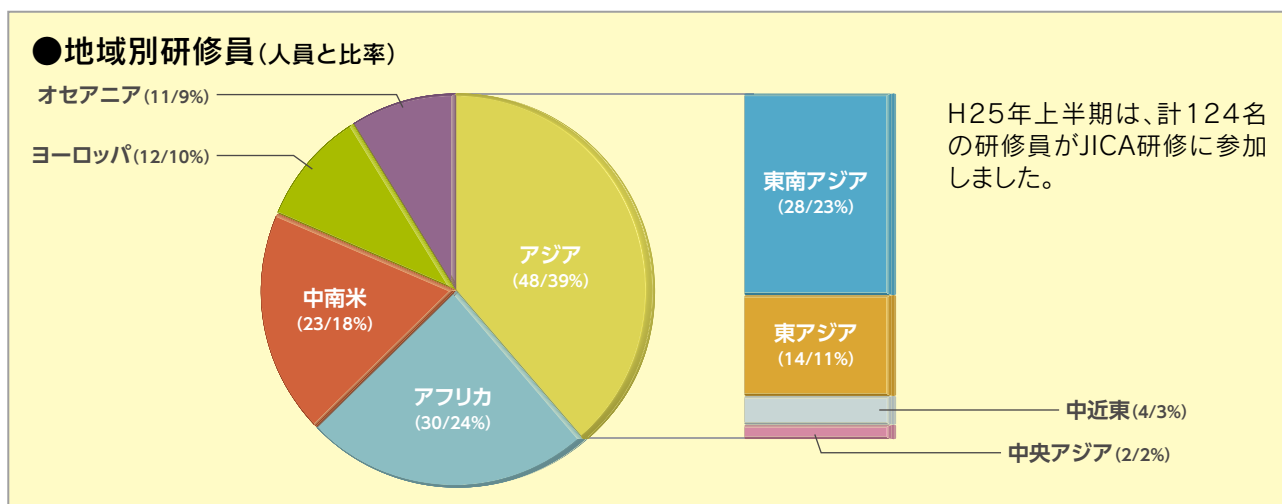
1 H25年度上半期に実施された研修コース実績

(H25年4月～9月)

平成25年度上半期に実施されたJICA/KITA研修コース									
No.	分類	コース名	研修員 人 数	コースリーダー (AL or SCL)	平成25年				
					4	5	6	7	8
1	環境 管理	大気汚染源管理	6	貴戸 東		5/8	6/21		
2		廃棄物管理技術 (A)	10	原口清史				7/7	9/7
3		コンポスト事業運営 (A)	9	指輪 勤				7/24	8/10
4	水資源	産業廃水処理技術 (A)	8	川崎淳司 (塚本康敬)			6/16		9/7
5		水環境行政	10	植山高次			6/23	7/13	
6	生産 技術	中南米地域生産性向上 活動普及	7	河崎克彦 (宮本 正)			6/5	7/20	
7		ベトナム生産性向上のための 実践的経営管理 (A)	6	宮本 正 (河崎克彦)				7/21	8/3
8		南東欧地域クリーナー プロダクション振興	9	小杉 充		5/23	7/6		
9	省エネ	インド省エネルギー技術 (1)	16	大和俊介 (植山高次)			6/25	8/2	
10		低炭素化社会実現のための 発電技術 (A)	14	藤井岱輔		5/8	6/13		
11	職業 保健	中南米地域 中小企業・ 地場産業活性化 (A)	10	三木義男				7/10	8/10
12		アフリカ地域 実践的電気・ 電子技術者育成	9	久良修郭				7/22	9/21
13		アフリカ地域 起業家育成・ 中小零細企業活性化 (A)	10	三木義男		5/8	6/7		

H25年度上半期は計13件の研修コースが実施されました。何れの研修コースも講義と研修見学を上手く織り込んで、安全第一で無事研修を終了しております。研修員は多国から参加されていましたが、大変有意義な研修コースであったとうれしいお言葉を頂いております。

2 H25年度上半期に来日した研修員



益々重要になる低炭素化への取組み

「低炭素化のための環境技術」コース

コースリーダー 矢頭 昭治

日本と密接な関係にあるアジア地域では大気汚染を初めとした環境汚染の進行と共に、CO2排出量の急増が地球環境に大きな影響を及ぼしつつあり対策が急がれているのは周知の通りです。そのような状況でJICA九州によって「低炭素化のための環境技術」研修コースが実施されました。本コースはH23/9に開講し3回実施されてH25/10に閉講となりました。

この間にアジア地域11か国より延べ32名の研修員が来日して研修を受けました。今回の研修で環境改善と省エネルギーの重要性を再認識して頂くと共に、多くの知識を共有し成功裏に研修を終了しました。各研修員は研修成果の集大成として、自国の課題解決の為に、自信をもってアクションプランを発表して帰国しました。今後これらの研修内容の成果が期待されます。

日本も深刻な公害問題を多くの努力により克服し、現在では環境保護と資源の有効活用を目的に循環型社会形成に取り組んでおります。経済発展途上での都市づくりでは、日本で学んだ知識・技術を、十二分に活用して自国の発展の為に展開されることを願って止みません。

本コースは今回をもって終了しますが、世界規模での環境破壊を抑制して低炭素化社会の実現を推進することは益々重要な課題です。

今後、同様の研修が実施される場合に備えて、更なる効果的な研修の企画立案を検討すると共に、各講師陣と密接な関りをより一層強めて、JICA研修で国際貢献度がさらに飛躍することを祈念して結びとします。



九州電力(株)
メガソーラ大牟田発電所にて

北九州市環境ミュージアム
での研修風景



ゴミからコンポストは卵を孵すに似たり!

「コンポスト事業運営A」コース

コースリーダー 指輪 勤

コンポスト事業運営は昨年度から始まった研修コースで、今回は7か国より9名が参加されました。コンポストに特化した研修で研修期間は、2週間強と短いものの出来る限り実地見聞の機会を多くつくり、そのなかで各国の事情にあった事例や参考になるべく技術や運営方法を肌身で感ずるように図りました。今回の研修員は有機廃棄物の減量を目指す廃棄物に関わる行政官だけでなく、コンポストそのものの品質や製造・販売に関心を持った農地改革に関する業務従事者もあり、質問や意見交換が多岐に渡り、コース管理者にとってもいろいろと考えさせられることが多々ありました。開発途上国における廃棄物リサイクルのなかでこのコンポスト化が抜きん出て多いのは、今までの実績が示しており、これはやはり低額の出資で設備なども比較的簡単なことと有機廃棄物の割合が比較的多いという事情からだと思われます。しかしながら、事業としてうまく運営できるかどうかはまだまだ課題も多くそれらを1つ1つ克服して行かねばなりません。特に感じるのは実務者の絶え間ない努力と細かい配慮がなければ、簡単に成功しません。つまりコンポスト事業は多くのお金や

技術をあまり要しないように見えても、それに代わる何かが必要であると認識してもらうことを願っております。



伊万里はちがめプランにて



野菜達から好かれる美味しいコンポちゃんになあ〜れ!

産業廃水の汚染と戦う途上国の行政官

「産業廃水処理技術A」コース

コースリーダー 川崎 淳司

水俣病の悲惨な出来事は、未だ多くの人達に苦しみを与え続けています。ここ北九州市の洞海湾も生物の存在を許さない程の汚染状態でしたが産・学・官協力の下に克服してきました。この研修コースは、これら日本の苦い経験とその改善に関する施策や技術を開発途上国の環境担当行政官に提供することを目的にH25年6月から9月にかけて約2.5ヶ月開設されました。研修員は、環境汚染の話題に尽きない中国や政情不安が続いているエジプト、或いは、民主化が進んできたミャンマーなど7ヶ国8人が参加しました。研修内容は、「水質保全行政」「廃水処理基礎理論」「水処理モデルテスト」「廃水処理の操業と保全」など5つの単元目標を掲げ実施しました。研修は理論のみでなく、水処理モデルテストや水質試験など現場実習通じた知識の向上に重点を置いているのが特徴です。コース開設期間が真夏でしたが、皆、熱心に研修に励みました。特に、ムスリムの研修員はラマダンと重なり酷暑の中を飲食抜きでよく頑張りました。研修員は、研修を通じて得た知見を基に自組織の課題である「水処理設備の水質改善」や「廃水処理設計マニュアルの作成」など帰国後、提案

／実施するアクションプランを作成しました。日本での研修が、彼らの業務に役立ち、日本の廃水汚染問題の歴史が二度と繰り返されないことを祈る次第です。



(株)山本工作所にて



琵琶湖博物館にて

新企画インド電力業界向け省エネ技術コース好評裏に終了

「インド省エネルギー技術」コース

コースリーダー 植山 高次、大和 俊介

インド国別省エネ研修コースは産業向け2コースと中小企業向け1コースの3コースを毎年開催して来ましたが、スタート以来5年を経過し、産業向けコースの参加者が行政官・コンサルタント中心から、企業からの研修員中心に変わり、より具体的な技術の提供が求められる様になりました。そこで、産業向けの2コースをそれぞれ電力業界向けと一般産業向けとに特化することにしました。

電力業界向けの研修内容は(1)発電主機の効率維持・回復、(2)所内電力の削減、(3)顧客の省エネとしました。(2)と(3)に必要な技術は同じであることがポイントで、電力業界が自社の省エネを図るのみならず、将来的には、政府と協力し国全体の省エネ活動を牽引することを期待したカリキュラム構成になっています。(1)は日本の発電所が30年を経ても設計効率を維持しているに比べて、インドの場合ほとんどが10%以上効率ダウンしている現状を考慮して、保全の重要性を認識して頂くことを目的とした内容です。

インド電力業界向けコースは2013.1.17～2.22と2013.6.25～8.1と2回実施しました。前者には電力会

社勤務者15名が参加しましたが、後者には政府1名、コンサルタント5名、電力会社勤務者6名、自家発電勤務者3名と、当方の意図を反映したバランス良い研修員分布となりました。

実施の結果は、週報・質問票・評価会を見る限り、研修員の満足度は非常に高く、アクションプランの出来も上々でした。次年度もカリキュラムに工夫を重ね、更に良いコースにしたいと考えています。



すべてのタイプの火力発電所を見学



理解を深める為の演習・実習をふんだんに盛り込む

ベトナム製造中小企業の離陸支援

「ベトナム生産性向上のための経営管理A」コース

コースリーダー 宮本 正

「ベトナム・生産性向上のための実践管理」コースを開設して4年目になります。当初2年は希望に拠って1コース：10～12名で行いましたが、現場見学・講義や演習になると散漫に成りがちでした。今回は研修生の希望も踏まえてハノイ・ホーチミンの2班・6名の2コースに編成換えしました。効果はてきめんで関係者全員の気の入れ方は一変しました。研修員は、幹部層でも在り研修期間の2週間は企業を離れられる限界となります。創業10年で従業員（100名）、年商（1.5億円～2億円）、経営層（30歳～40歳代）の企業群が切磋琢磨する世界です。国営企業と民間企業の併存社会ですが、目指す姿は同じです。知識は実践を通じて智恵に変わって行くことを体感して行きます。帰国後は、仲間になって相互支援を行う事や「親亀」になって周囲へ智恵の普及活動を行う事としたものを実践しています。「金型成型品の不具合が収まらない」「負荷オーバー、外注化したら納期が混乱」「新鋭機を入れたい」「新工場へ移転したい」「有償で良いからもっと勉強をしたい」と相談が続きます。興隆期の若い国と人々支援と交流が「広がる世界の中で共に生きて行く」こと

に繋がって行きます。



三菱長崎機工（株）で研修を終えて～お礼の絵を中にして～



現場観察結果による改善提案まとめ中

研修員のチームワークも良く、楽しい研修ができました

「中南米地域 生産性向上活動普及」コース

コースリーダー 河崎 克彦

本コースは南米地域、カリブ海周辺地域に於いて中小企業のカイゼン、5S等の生産性向上活動を指導している要員の強化、拡大を目的とした講座です。また現地で生産性向上活動を指導しているシニアボランティアとの協同活動力を強化する研修でもあります。4年前より開始して今年で5年目となります。今年はメキシコ、ドミニカ、ホンジュラス、コロンビア、パラグアイから計7名の研修生が参加しました。7名中6名が女性です。

研修内容は生産管理、品質管理、生産技術が中心です。いろいろな管理手法を言葉として知っていても、現場での実践活動が少なく、実際にどのように運用したら良いのか自信の持てないのが実体ようです。企業研修で実際に日本の現場でそれがどのように使われ、運用されているかを調査のため中小企業を訪問しました。日本における5S活動を始めた自主改善活動、情報のオープン化、共有化、トップとワーカーのコミュにケーション、さらにはワーカーのレベルの高さに感心していました。日本の生産性向上の基本を感じたようです。全員真面目でチームワークも良く、楽しく研修することができました。一番

力を入れたのは自国での中小企業の指導にあたって改善計画の立案が必要であり、その事例として各自のアクションプランの作成です。何度も修正を重ね、やっとデータを基にしたQCストーリーに沿ったものが完成しました。これが皆の一番の達成感のようでした。

この地域は日本とは労働習慣、カルチャーが違い、日本方式がそのまま適用できると思いませんが、あきらめず、各国流、各組織流にアレンジして、応用、適用してもらって、是非、独自の生産性向上活動を展開して欲しいと願っています。



(株)村上精機工作所殿の5Sリーダとの意見交換会后

開発途上地域でこそ先端技術教育が必要!

「アフリカ地域実践的電気・電子技術者育成」コース

コースリーダー 久良 修 郭

本研修コースは、第2回目として平成25年7月より2カ月にわたって実施されました。参加者はエジプト(2)、エチオピア(1)、ケニア(1)リベリア(1)、ナミビア(2)、スーダン(1)、ウガンダ(1)の7か国9名の方でした。研修内容は、現場で必要となるモータ点検・保守技術、電気を取り扱う上での諸注意事項、電子機器構成の基本的な方式の説明とその概要に関する実習などです。昨年実施したものと同様、講義を行うとともにそれに関する実習、実験を行うという形態で研修を行いました。しかし、昨年は研修員が4名でしたが本年は9名と倍増したことにより、質問数の倍増や活発な質疑応答といった状況も起こり実験・実習の時間延長がしばしば発生しましたが研修員には満足頂ける研修を行うことができたと思っています。最終日のアンケートからもこのことが伺え、うれしさを実感しています。

今回の研修を通じて気づいたことの一つに、開発途上地域でこそ、先端技術教育が必要になる、ということです。“携帯電話システム”の例を挙げるまでもなく、技術の飛躍が大きいことと必要性が高いことは必ずしも一致

しない。高い技術をいかに段階的に分かり易く説明して行くかといったことに関する知識も大切であることを再認識させられた研修でした。



電子機器 保守・点検の実習風景

いつもご協力有難うございます!

おんが自動車学校の皆さんの熱い指導に感謝!!

コースリーダー 植山 高次

KITAでは、地球温暖化防止を望む世界のニーズに対応すべく、12の省エネ・新エネに関するJICA研修コースを設けています(平成25年度実績)。この中で日本の省エネ政策研修の一環として「自動車学校での省エネ教育」を設けています。

日本では環境教育は行われていますが、省エネ教育はほとんど行われていません。その中で「エコドライブ教育」という形で高校生を対象に省エネ教育を行っているおんが自動車学校を貴重な事例として紹介しています。おんが自動車学校は5年前に教習用乗用車をすべてハイブリッドカーにしたほど省エネに熱心な企業です。ここでは「エコドライブ」研修と「運行管理者」教育を組み合わせ、後者の資格取得を武器に前者の事業所教育で培ったネットワークを利用して、高校生の就職活動を支援する素晴らしい取り組みも行っています。若年人口減少のあおりで自動車学校の生徒は減少しています。しかし、おんが自動車学校はエコドライブ教育に代表されるさまざまな取り組みで、事業を拡大しています。

研修では講義の後、エコドライブの実習体験をします。

エコドライブを受講した事業所は燃料の削減のみならず、事故率を大幅に削減出来ているそうです。研修では出迎えから見送りまでスタッフ全員で“おもてなし”して頂き、実習では自社の取り組みを理解して貰おうと、熱い指導を頂きました。お世話になった力武社長始め、関係スタッフの方々に感謝致すとともに、来年度以降の受け入れ協力を宜しくお願い致します。



パソコンを使っての交通法規の学習システム体験
(手前:花生指導員)



ハイブリッドカーでのエコドライブ運転実習では社長自ら熱心に指導
(中央:力武社長、右:元山指導員)

ロシアから3つの鉄鋼関連ミッション来訪(技術と環境の都市・北九州市の魅力)

副理事長 工藤 和也

2013年前期半年間に3つのロシア・ミッションが次々と北九州市を訪問したことはBig surpriseな出来事でした。

訪問団は以下のようなミッション構成です。

①2月:スベルドロフスク州(Sverdlovsk Region)

知事一行(10名)

- ・北九州市、KITAからのプレゼンテーション実施。(生産性向上、鉄鋼関連技術)
- ・スベルドロフスク州からのプレゼンテーション実施。
- ・商談会・エコタウン、日産刈田工場視察

②5月:ロシア鉄鋼ビジネスミッション(8名)

- ・ロシア側参加企業は、マシプロム(Mashprom)、ノボリペツク(Novolipetsk)、マグニトゴルスク(Magnitogorsk)、ヴィクサ(Vyksa)の4社。
- ・北九州企業5社訪問、省エネ技術や鉄鋼先端技術を紹介。

③7月:鉄鋼スラグ処理関連会社(エンジニアリング

会社とメチエルの子会社)(2名)

- ・北九州市のスラグ処理会社、高炉セメント工場、不定形耐火物会社訪問

これらのロシア・ミッションの訪問によって北九州の魅力を変えて認識したロシアにとって北九州の魅力は何か?様々な技術がパッケージとして揃っていることかもしれない。KITAとしてビジネスマッチングが成功するように粘り強くフォローアップしたい。

スラグ処理会社
工場オフィス前にて

高炉セメント工場にて

ハイフォン市製造業の技術力・経営力向上ノウハウ移転プログラム

技術協力部長 藤本 研一

ベトナム国ハイフォン市には日系企業の進出が続いていますが、現地の製造業がまだ十分育っていないため、進出企業からの品質要望等に十分応えることができていません。ハイフォン地域の経済発展を促進するためには地場製造業の技術・経営力の底上げが急務です。そのため、平成23年度より、JICA草の根事業の支援を受け、ハイフォン市地場企業の支援を行いました。具体的には、ハイフォン工業職業短期大学(HPIVC)の教師を北九州市に招聘し研修を行うと共に、地場企業への5Sによる現場改善指導等を行い、ハイフォン市企業の工場管理力の向上に取り組んできました。これらの活動成果を踏まえ、さらに活動内容を深化させ、活動範囲を拡大した案件が「地域経済活性化枠」として9月、採択されました。

今回採択された事業はハイフォン地域の経済を牽引するリーダー企業の育成とともに、現地企業と北九州企業の取引拡大を目指すことを目標にしています。そのため、①これまでの工場診断に加え、専門家が問

題解決の目途が立つまで、長期間企業を指導する、②経営管理に関する人材を育成するため、HPIVCで経営管理が講義できる教員を育成する、③地域の有望企業を北九州に招聘し研修する、④北九州企業との技術交流を目的にし、北九州市製造業の技術・製品を展示する「常設展示場」を設置・運営します。このような具体的な活動項目に沿って活動することになっています。



常設展示場のイメージの一例

タイ 鉄鋼業との技術交流

技術協力部 河島 三晃

2011年秋のモンスーン期、タイを襲った大洪水の記憶は生々しい。チャオプラヤー川(メコン川)流域で甚大な被害をもたらし、アユタヤ県を中心に進出する日系企業も直接的に罹災した会社は460社に及ぶ。このタイ国の鉄鋼業調査に北九州市とJETROの賛同を得て7月から準備に乗り出しました。屑鉄を主な原料とする電気炉業界中心の世界という構造を踏まえて9月末から現地に赴きました。元々親日的な国柄と鉄鋼メーカーが民営主体で、訪問会社やタイ鉄鋼協会も非常にオープン。事前の質問状にも万全の準備をして頂き技術ミーティングと工場見学を滞りなく完遂できたことは幸運でした。平日深夜、土日操業という電気炉中心の稼働で私共も早朝からの工場見学、昼間技術会議という訪問にすっかりハマりました。何よりも驚いたのはその技術力の高さと省エネや生産性改善に取り組む姿勢は半端でない積極性や熱意を職場の隅々で感じ取ったことです。アセアン諸国の鉄鋼の中で際立った生産量は建設、自動車、家電など伸長著し

い分野で更なるステップアップの様相を見せます。鋼材消費量は2000万トンも間近に見えるタイ鉄鋼業界の次の一步に有効な支援を北九州企業群と一緒に進みたいと考えます。



電気炉工場の見学



技術会議の風景

ベトナム(ハノイ・ハイフォン)とのビジネス交流が活発化しています!

技術協力部 宮田 利勝、齋藤 導宣

KITAでは北九州市とジェトロ(日本貿易振興機構)と共に北九州地域とベトナムのハノイ・ハイフォン地域間のビジネス交流支援を行っています。

本年度は9月3日から7日まで機械金属産業ミッションを派遣、北九州企業7社の参加がありました。1日目のハノイ市では日越共催の第5回部品調達展示会の視察と商談会、翌日にはハノイ、ハイフォン両市10社の工場訪問、そして最終日には北九州市が友好協力協定を結んでいるハイフォン市においてセミナーおよび商談会を実施しました。

両市での商談会は、面談の順番を待つ長い列ができてきたり、終了予定時刻を超えての熱い商談があったりで大盛況でした。商談件数は展示会、工場訪問、そして両市での商談会合わせて121件に上り、これまでの実績を大きく上回りました。またミッション参加企業からは「製造委託したい」、「共同事業化を考えたい」、「ベトナム企業の現状がよく理解できた」など、今後のビジネス交流につながる声が多く聞かれました。

1月にはハノイ、ハイフォン両市の有望企業を北九州市に招聘、再度の商談会を開催して、ビジネス交流の更なる深まりと広がりへの支援を行う予定です。

今後、KITAではもっと広い事業分野で、もっと広い地域でのビジネス交流の促進と支援を進めて参ります。



ハノイ市での商談会



ハイフォン市での会社紹介

注目される「設備保全技術」「今ですよ」出番は!

北九州メンテナンス技術研究会 (KME)

KME事務局 青井 澤海

モノづくり企業の生産設備はもとより、公共施設であるトンネル・橋梁等インフラの経年劣化が進行し、整備補修が滞留しつつある昨今、まさに「ストックメンテナンス時代」と言われております。

劣化がどの程度進展し、いつまでに、どの様に措置すべきなのか、...の答えを出せるのは、高度の設備保全技術を有する「北九州メンテナンス技術研究会 (KME)」会員各社の技術・経験に他なりません。

発足30年を超える本研究会は、大学或いは企業で活躍される権威者を講師に迎えて実践講座を開講し、受講者間で相互研鑽しながら、技術力の向上に取り組んできました。

「疲労・強度」「腐食・防食」「溶接技術」「トライボロジー」「モータ・インバータ」「設備診断技術」など各種のセミナーを開催しています。

その理論と実践は、北九州ならではの「メンテナンスエンジニア育成の場」であり、培ってきた設備保全技術は、今や、国内だけでなく海外からも多くの注目を集めています。

北九州メンテナンス技術研究会の会員各社は、「世界一の設備保全技術を有している」と言っても過言ではありません。

ご期待に添える結果を! まさに、今が出番の時です。



「疲労・強度」セミナー



「モータ・インバータ」セミナー

天女舞う国ベトナムとの出会い(越国での新規ビジネス挑戦記)

～海外展開協力会社の紹介～

行き当たりばったり、出たところ勝負、ベトナムとの出会いはひょんな事がきっかけでした。

約1年前ベトナムでプレゼンをしてくれと、KITAのとおる人から急に依頼され、断るに断れない状況でした。そこで捻り出したのが友人の会社が製造している「バイオトイレ」。バイオトイレとは、細菌を使って排泄物を処理するトイレの事です。

まあ何とかなんとかと資料を作り、いざベトナムへ。しかし、これが意外にも大反響、説明するのに声が震える程でした。その時に小生の名刺にメールアドレスを書いてくれたベトナム人がいました。通訳に聞けば、観光名所ハロン湾を管理する役人のお偉方との事。帰国後、辞書片手に必死で英文のメールを書きました、この名刺の殴り書きだけが頼みの綱です。

その後、先方からは是非会いたいとの返事。それから一年、現地パートナー探し、現地での技術指導、客先へのプレゼン資料作り等KITAの皆様には、微に入り細に渡りご指導を賜りました。お陰様で、ハロン湾にデモ機を設置し、稼働させ、実機の引合いを頂くまでにビジネスが進展しています。

冒頭に書きました様に、ベトナムとの出会いは唐突なも

アタカ株式会社 プロジェクト事業部 部長 新富 国博

のでしたが、思いもかけず劇的な展開になりました。KITA様には心から感謝をしています。ベトナムは「何か有る、何かが見える」そんな感じのする不思議な国です。そして、ベトナムの人々は「信頼できる、誇り高き人々」とであると肌で感じています。皆様も是非一度、観光気分ベトナムを訪問してみても如何でしょうか? その折にはハロン湾で北九州ブランドのバイオトイレを試してみてください!

このビジネスはベトナムのみならず東南アジアの国々そして世界の観光地に広げていきたい...と夢は膨らんでいます。



観光名所ハロン湾岸に設置されたバイオトイレ



国際親善報告

～北九州町歩き～

事務課長 豊田 めぐみ

「北九州町歩き」は、遠い異国から来日し、東京でも大阪でもなく、ここ北九州市で研修を受けてもらうからには、研修員に北九州市のことをより良く知って欲しい、北九州市滞在を心から楽しんで欲しいとの思いから、平成24年度にスタートさせた新規プログラムです。平成24年度は全4回実施しましたが、研修員からの評価が高かったことから、今年度も4月から11月までに3回実施しました。町歩きの中でも一番人気の「小倉町歩き」は、研修員が滞在している九州国際センターを出発し、「彫刻の町・八幡」を象徴する彫刻群を紹介しながら八幡駅に向かい、当駅では切符の買い方や自動改札機の通り方を指南、その後、電車に乗り込み、車窓を楽しみつつ、西小倉駅で下車。西小倉駅⇒常盤橋⇒リバーウォーク北九州⇒小倉城庭園⇒小倉城⇒太陽の橋⇒旦過市場⇒魚町銀天街⇒小倉祇園太鼓像⇒小倉駅の順に散策するのが基本のルートです。11月9日(土)に実施した「小倉町歩き」は北九州市立大学外国語学部と合同で企画し、同学部の学生ボランティアの皆さんの協力のもと、英語とスペイン語を駆使ながら観光案内しました。参加した環境教育コースの研修員9名は、環境未来都市を標榜する北九州にふさわしく、町のあちこちに設置されている太陽光パネルに強い関心を示すと同時に、旧城下町・小倉の風情、特に、小倉城の外観の美しさ、歴史資料館も兼ねた城内

展示物の面白さ、小倉城庭園内の大名屋敷の「からくり戸」や「無窓欄間」といった純日本的な工夫、更には、太陽の橋に設置されたユニークな彫像「宇宙七曜星の精」が、実は、太陽の光を通すことによって市花であるヒマワリの花の形を地上に投影するといった、北九州市民ですらあまり知らないような情報に感嘆しきりでした。所要時間約5時間のミニプログラムですが、研修員の心に北九州市での楽しい思い出が少しでも多く残ってくれるよう、今後も続けて行きたいと思っています。



小倉城庭園にて



小倉魚町銀天街散策

KITA人事異動(2013年6月30日～12月31日)

新 任

コースリーダー	川崎 順一(2013年 8月1日付)
コースリーダー	篠原 一久(2013年 8月1日付)
コースリーダー	内藤 修治(2013年 8月1日付)
KME(北九州メンテナンス技術研究会)	青井 澤海(2013年 8月1日付)
研修専門部長	梅岡 勝之(2013年10月1日付)
コースリーダー	中島 康紀(2013年12月1日付)

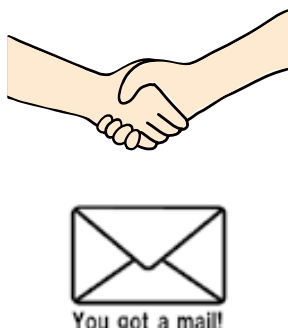
退 任

コースリーダー	荒川 敏一(2013年6月30日付)
技術協力部長専門員	田中 伸昌(2013年7月31日付)
KME(北九州メンテナンス技術研究会)	関 義明(2013年7月31日付)
コースリーダー	外山 弘(2013年8月31日付)
研修専門部長	伊達幸次郎(2013年9月30日付)

帰国研修員からの便り

～帰国研修員との交流～

コースリーダー 末田 元



研 修コース「下水道維持管理システムと排水処理技術B」に参加された研修員国は、下水道を今から始めるというところが多いようです。このため、研修員皆さんは色々な知識を吸収しようと非常に熱心でした。マークさんもその一人です。自国の水環境問題を画面で示してくれたり、私にも詳しい情報を提供して頂き、楽しく付きあわせて頂きました。マークさん (Mr. Mark LEKGJONAJ) とは、時々メール交換をしています。

今回、私から彼宛に次の内容のメールを送信しました。「本年10月中旬からコソボ国の研修員に対し下水道研修が実施される。当研修は私が担当することになったが、使用言語がアルバニア語なので不安を感じている。」旨連絡したところ、「アルバニア語で役立つ事がありましたら遠慮なく連絡してほしい。日本でお世話になったことに対し少しでもお返しができればと思ってます。」と返信がありました。時々メール交換ですが、このようなつながりができ、非常にありがたく感じています。

この研修には8か国から9名の研修員が参加しました。マークさんはじめ皆、自国の下水道を何とか改善したいという人ばかりで熱心な受講態度がうかがわれました。マークさんにも今まで学んできた知識を大いに発揮し自国での活躍に期待しています。



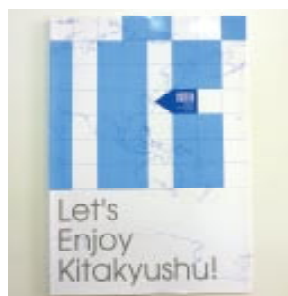
実習中の研修員

KITA支援団体から助成金を頂きました

☆ 平成25年9月、(公財)吉川育英会(理事長 吉川卓志様)より、KITAが研修員向けに作成・配布している英文生活情報誌「Let's Enjoy Kitakyushu!」の助成に10万円を頂きました。

☆ 平成25年11月、国際ソロプチミスト北九州(会長 鶴 典子様)より、国際親善秋季バスハイク(平成25年10月27日実施)の助成に10万円を頂きました。

両団体のご厚意に心より感謝申し上げます。



英文生活情報誌「Let's Enjoy Kitakyushu!」

国際親善秋季バスハイク
(平成25年10月27日実施)



KITA ニュース

No.40(第40号)

2014年1月1日発行
(1月・7月発行)

発行：公益財団法人北九州国際技術協力協会

編集発行人：事務局長 藤原 直捷

〒805-0062 北九州市八幡東区平野一丁目1番1号 国際村交流センター4階

TEL:093-662-7171 FAX:093-662-7177 E-mail:info@kita.or.jp

●右記Web site (KITAホームページ) には、KITAのご案内、活動、過去のKITAニュースなどを掲載していますのでご覧下さい。

KITA

検索

カチッ!

<http://www.kita.or.jp/>